

飯山市埋蔵文化財調査報告 第38集

しづ ま かん せき
静 間 館 跡

— 静間区書庫建設に伴う発掘調査報告 —

1994. 2

長野県飯山市教育委員会

本書の内容

- 1 本書は、長野県飯山市大字静間字中町1, 216番地ほかに所在する静間館跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、区有文書の書庫建設に伴うもので、渡辺祐吉静間区長の依頼により平成5年9月6日より16日まで、飯山市教育委員会が市費で実施した。
- 3 調査面積は約15m²で発掘により次の成果を得た。

静間館跡は、以前より単郭で周囲にはコの字形に空堀がめぐると推定されていたが、東側の当該調査地区の平坦部は腰郭とする意見もあった。今回の調査で空堀が検出され、静間館は単郭で北側の清川に面する以外の周囲には空堀がめぐっていたことが明らかとなった。

- 4 調査の参加者は次のとおりである。

小林新治・望月静雄・土屋久栄・斎藤和子・樋口栄

- 5 本書は飯山市教育委員会事務局が作成したが、図版トレースは小川ちか子が担当した。分責は望月にある。

教育長 岩崎 彌 教育次長 月岡久幸 社会教育係長 今清水豊治

目 次

発掘調査のあらまし	1
なぜ発掘することになったのか	
発掘日誌	
考古学からみた静間館跡	3
飯山市一級の中世豪族の館	
いつごろ使用された館か	
調査結果の説明	5
堀の発見	
きれいな堀の底	
あとがき	7

発掘調査のあらまし

なぜ発掘をすることになったか

平成5年8月初旬、静間渡辺区長より静間神社の一角に行政文書を所蔵するための書庫建設に伴う埋蔵文化財の照会があった。静間神社は、かつて志津間氏館跡と推定される中世館内に鎮座しており、周辺を含めて埋蔵文化財包蔵地として周知されていた。

市教育委員会で現地を視察した結果、郭外であったが腰郭のように平坦地となっており、何らかの施設があると思われた。また、静間の松澤芳宏は北側で道路工事のカッティングの際に空堀が確認されたと報告している（松澤1993）。教育委員会事務局は協議の結果、文化財保護法の規定により破壊される前に緊急発掘を実施して記録保存を図ることに決定した。



図1 静間館跡の位置 (1:10,000)

文化財保護法による諸手続きを処理し、8月19日に再度渡辺区長と協議を行った。建物は 4×5 mの比較的小さな施設であり、基礎も深度60cmの設計図面であった。そのため、空堀が検出された場合でも、深そうな場合には底面までは調査しなくとも保護されるため、60cmの深度は最低調査することとした。

調査日誌

調査は、9月6日より開始し、静間館の全体測量を7日まで実施した。8日には調査区の草刈りの後、スコップで掘り下げを開始した。約40cmで空堀が検出されたが、浅いので底面まで調査することにした。9・10日は雨天のため、10日の午前中のみしか実施できなかった。13日にはもう一か所着手し（B地区）、完了区（A地区）の平板測量を実施。夕刻より降雨となったため終了の予定であったが延期することにした。16日にB地区的セクションを実測し、埋め戻しと器材の撤収を行いすべての作業が終了した。

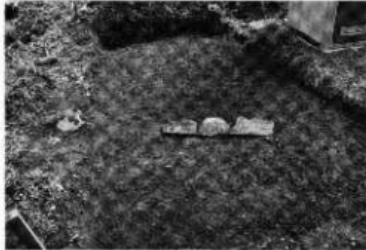


写真1 碇石

近代以降の建物の礎石 表土より10cm下位より発見された。渡辺区長の話によれば、以前建物があったとのことで、その礎石と思われる。切り石を使用しているが、下部に基礎は認められなかった。



写真2 調査状況

考古学からみた静間館跡

飯山市一級の中世豪族の館

静間館跡は、飯山市大字静間字中町に所在する。清川扇状地の扇央付近にあり、北側が清川によって浸食された残丘状の小高いところにある。最近、西側に長野県飯山南高等学校が移転新築されている。この館跡には、大正時代に静間地区の各社を合祀した静間神社がある。この神社によって館跡がかなり変革されたらしい。また、かつては飯山市静間保育園も建てられており土壘などが壊されている。ただし、一部には約2m50cmの高さを持つ土壘の一部が残っており、周囲や郭内も比較的良く残っている。飯山市でも比較的良く残された一級の中世の館跡といえる。

静間館跡は、平安時代末期から鎌倉時代にかけて文献にも登場する志妻（志妻・志津間・志津摩）氏館跡と伝承されている。堀の部分を除いた規模は50m×45mの方形で、土壘の内側の部分では推定1400m²、約425坪の敷地となる。現在は神社の庭となっており、ゲートボール場も造られている。

いつごろ使用された館か

静間館及び近接地区での既出遺物はほとんど知られていない。松澤芳宏によれば、弥生式磨製石斧、平安時代中期以降と思われる土帥器・須恵器、中国産の青磁と思われる磁器1片が採集されているに過ぎないらしい。したがって、静間館の存続年代を証する明確な資料はまだ確認されていないということになる。もし、文献に現れる志妻氏の館であると証明されれば平安時代末期には造られていたことになり、市内最古の館跡となるのだが。



写真3 静間館跡航空写真

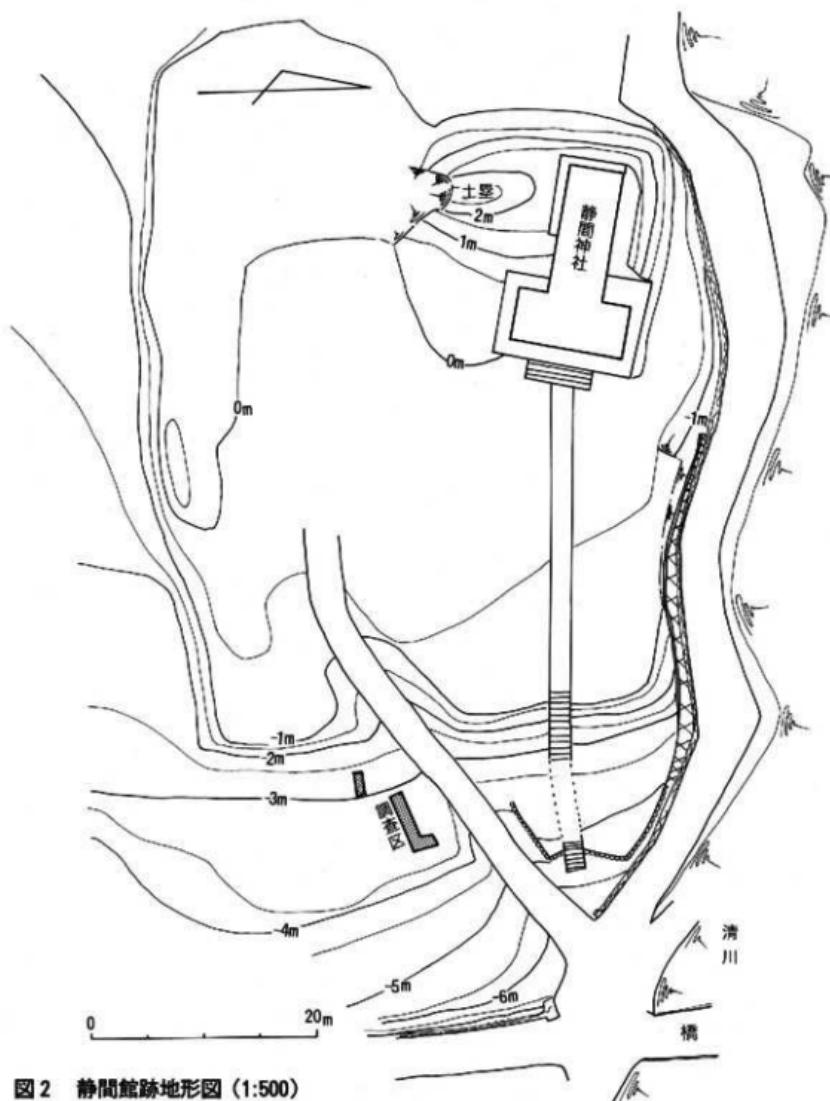


図2 静間館跡地形図 (1:500)

調査結果の説明

堀の一部を発見

調査区はA・Bの二か所あるが、いずれも堀の跡が検出されている。障害物があったため適当な地点を調査できなく、そのため堀の幅や形態についても明確ではない。A地区では、堀の外側の立ち上がりが確認できた(図4)。二段に掘り込みがみられる。セクションによれば、当初の堀が後に改修されて拡幅されたが、その時同時に浅くなったと考えられる。当初から二段となっていた可能性は低い。



写真4 堀の棱出

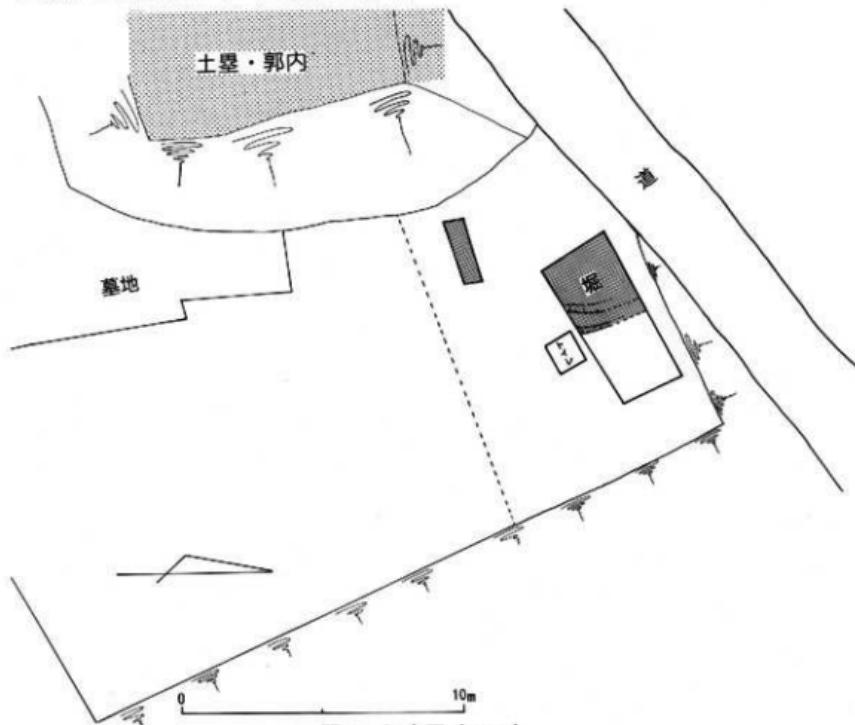


図3 調査区 (1:200)

深さは、掘り込みからは最深部が80cm、郭からは3m、さらに土塁が2.5mあったと推定されるので、土塁頂部からは6.3mの比高差があったことになる。

B地区は調査対象地の端部で建物を建設する場所ではなかったが、A地区では堀外の立ち上がりは確認できたが、郭側の立ち上がりを調査することができなかつたので最小面積を調査した。その結果、ほぼ堀底から徐々に傾斜を増して土塁に接続することが確かめられ、当時の堀の立ち上がりにそのまま黒色土が厚く堆積して現在の斜面となったことが明らかにできた。すなわち、A・B地区の調査結果から、堀の幅は5~6mと推定することができる。

なお、かつて北側の道路

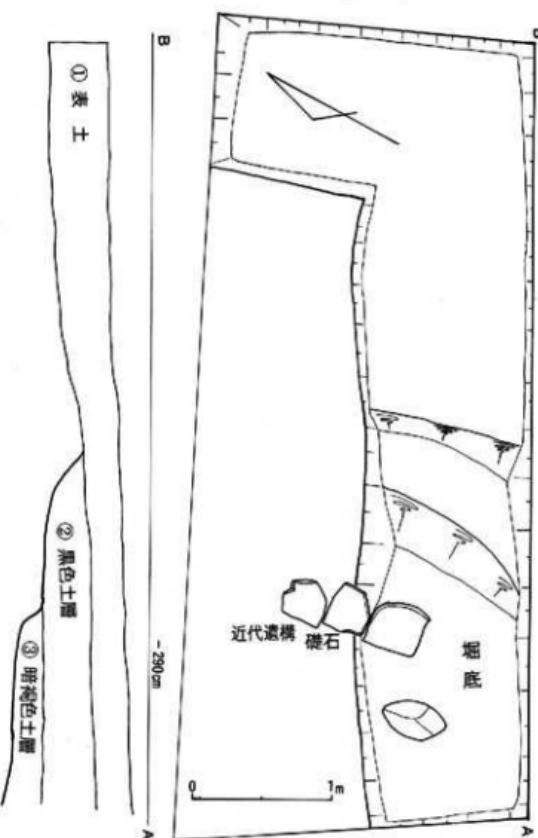


写真5 堀



写真6 堀から郭内を望む

工事に伴うカッティングでV字形の空堀が確認されているが（松澤 1993）、今回の調査区の堀底はA地区では平坦な底面が続いており、同一の堀が地区によって異なっているのか、別の堀であるのかどうかについては確認できなかつた。

きれいな堀の底

近世の城の水濠の調査では陶磁器などの遺物が多く出土

するが、静間館跡の空堀からは当時の使用した遺物は一点も出土しなかった。中世の空堀では長者清水の館（飯山市一山）では破片が多く出土したが堀底からではなく、上野の館（飯山市常盤）の外堀では一点も出土しなかった。これは、基本的には館の使用時には常に清掃をしていたためではないかと考えられる。

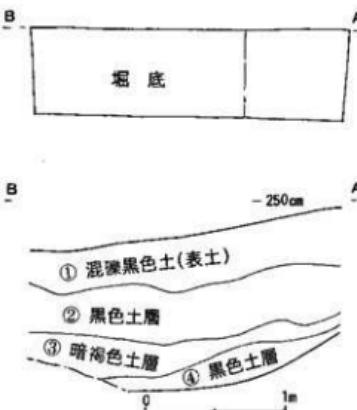


図6 B地点 堀 (1:40)

あとがき

わずか15m²の調査であったが、静間館跡の初めての発掘調査であり、具体的に明らかにされた部分も多い。以下に記載しておく。

- 1 静間館跡は単郭で、土壘とコの字形に空堀を設けた中世の館跡であることが再確認された。
- 2 堀は幅5～6mの規模を有するもので、土壘の頂部から堀底までの高さは6.3mもある雄大なものと推定される。ただし、堀の外側がどのように低地に接するのか調査できなかった。
- 3 以上のことから、静間館の規模は堀を含めた全面積は約3,000m²、土壘からの内部敷地は約半分の1,400m² (42坪) と推定される。

今回の調査にあたってご協力をいただいた渡辺祐吉静間区長ならびに参加いただいた皆さんにお礼申し上げる。

参考文献 松澤芳宏 1993 「静間館跡」 飯山市誌歴史編上巻所有

飯山市埋蔵文化財調査報告 第38集

静間館跡

— 静間区書庫建設に伴う発掘調査報告 —

平成6年2月10日発行

編集・発行 飯山市教育委員会

印 刷 (株)足立印刷所
